

JASIS

NEWS

No. 69

2022/3/28

日本インテリア学会会報

■会長挨拶

コロナ禍のなかでの大会に参加して

学会長 直井英雄（東京理科大学名誉教授）

コロナの状況が好転しないまま、2021年度関西支部担当の大会が、リモート開催となりました。2020年初頭からこの大会に至るまでの、コロナに翻弄された本学会の不本意な運営の顛末につきましては、会報67号に述べてありますのでここでは繰り返しません、それだけに、リモートとはいえ、ほぼ完全な形で大会が開催されたことは、誠に感慨深いものがありました。その初めてのリモート大会に会長として現地参加しましたので、そこで感じたこと、考えたことを述べておきたいと思います。IT弱者ゆえ、平凡といえば平凡な感想かも知れませんが、私にとってはこの上ない貴重な体験となりました。

リモート大会のベースとなる会場に到着してまず驚いたのは、4つの発表会場ごとに配置されたPC類とその担当者たちの整然とした体制でした。聞くところによると、前日までに何回も集まってリハーサルを繰り返したのだそうです。頭の下がる思いを抱くと同時に、それを見た段階で、初めての試みに対する心配も少し解けてきたことを覚えています。

実際の研究発表会にも、持ち込んだPCで覗いてみました。学生の研究発表表彰の審査にもかかわっていたので、各会場の審査対象者の発表をどうしても聞きたいと思っていたのです。慣れないパソコン操作でしたが、例年のような各会場右往左往方式より、よほどスムーズに審査をすることができました。

感心したのは、各会場の司会役の先生たちの見事な運営ぶりでした。必ずしもZoomに慣れていない発表者をうまく誘導したり、場合によってはPC操作の指導をしたりして、初めてのリモート発表会を見事に成り立たせてくださいました。考えてみれば、先生たちは、大学の授業や会議などでリモート慣れしているのですね。

卒業作品展も、昨年と同様、ウェブ開催となりました。私は、今年もこの作品展の表彰審査に加わりましたが、そこで改めて実感したのは、現物展示を見るのとPC画面で見るとでは、作品の理解に雲泥の差があるということです。しかしそれはやむを得ないことで、むしろ、ウェブ開催とはいえ、この行事を途切れさせずに続けてくださった関係者の尽力を大いに評価したいと思います。実は、ウェブ開催というのも相当面倒な作業を要するもののようなのです。

こうして、大会最大のイベントである研究発表会と卒業作品展が無事終了しました。正直、ほっとしました。と同時に、ITの威力に感服する1日でもありました。

翌日は、講演・見学会に参加しました。前半の講演会は、石田潤一郎先生の「阪神間の近代建築」の話、後半は、あの有名な「甲子園ホテル」の見学会でした。もちろん、両方ともリモートです。

講演会は、リモートであっても、対面で聞くのと何の遜色もないわかりやすい内容になっていたと感じました。一方、見学会は、私も現場に立ち会っていましたが、その空間のなかでリアルに体験するのとPC画面を通して見るのとでは、当然のことながら本質的に違います。予想されたこととはいえ、見学会はやはりリアルでないこと、これは正直思いました。

もうひとつ、リアルのよさをつくづく感じたのは、大会終了後、関係者を労うために開かれた打上げの席でした。その時点でのコロナ対応の作法を守った静かな懇親会でしたが、適度なお酒の力もあって、研究ごとからアートの領域にいたるまで、濃密な対話で盛り上がりました。しばらく忘れていた対面コミュニケーションの心地よさが、久しぶりに満喫できました。

以上が大会に参加しての感想です。総括めいた言い方をすれば、リモートでもイベントを十分成立させるITの威力と、同時に、実空間や対面コミュニケーションなどの持つリアルな世界の底力、その両方を強く実感させられた大会となりました。本学会にとっても、将来の可能性を拓く強力な武器になるものを得た気がします。

■第33回日本インテリア学会大会（関西）開催報告

実行委員長 黒田智子（武庫川女子大学）

2021年10月23日（土）、24日（日）の両日、第33回日本インテリア学会大会が、関西支部の担当により、武庫川女子大学において開催されました。少しでも次年度の参考になれば、という思いと共に報告申し上げます。

昨年度に続くコロナ禍により、日本インテリア学会初の完全オンライン開催となったため、全ての実行委員が未知・未経験の準備となりました。大過なく実施できたのは、中村孝之支部長、片山勢津子副支部長の豊富なご経験とリーダーシップのもと、学会本部とのコミュニケーションをとりながら、早い段階で実行委員会の組織構成を決め、状況に応じて柔軟に調整し、各実行委員が時宜にかなう役割分担を果たしたチームワークによるものです。

大きな方向性は、例年の方針に沿って前年度の大会実行委員会において話し合っていたため、今年度はそれを受けて準備を進めました。特にオンライン開催に関わる部分について重点的に報告いたします。大会参加者数は表1に示すとおりです。

表1 第33回大会参加者数

	研究会・講演会・見学会	研究会のみ	講演会・見学会のみ	合計
正会員	49	22	0	71
準会員	4	12	0	16
賛助会員	1	0	0	1
非会員	2	1	9	12
合計	56	35	9	100

1. 事前準備について

2021年1月、中村支部長の呼びかけで、コロナ禍により中止となった前年度案をもとに役割分担を検討し、今年度の準備が始動しました。この時点では、対面・オンライン・ハイブリッドのいずれの場合にも柔軟に対応できるように、新たに大会ホームページの開設、Zoom併用機器の設営（以下配信システム）・三密回避などの役割が設けられる一方、卒業作品展は昨年度に続き学会本部ホームページにて掲載、見学会・懇親会は通常通り行う計画でした。

6月になって完全オンラインで行うことを確定、パネルによる作品発表が研究発表と共にオンラインとなりました。同時に、記念講演会と見学会もオンラインとなり、懇親会も中止になるなどを決定しました。改めて役割を再検討し担当チームを決め、10月の大会実施に向けて検討事項の洗い出しに取り組みました。また、遠方からの参加を考慮する必要が無くなったため、第一日目に開会式と研究会、第二日目にオンライン講演会・見学会・表彰式・閉会式を行うことになり、例年よりもゆと

りあるプログラムを組むことができたと思います。

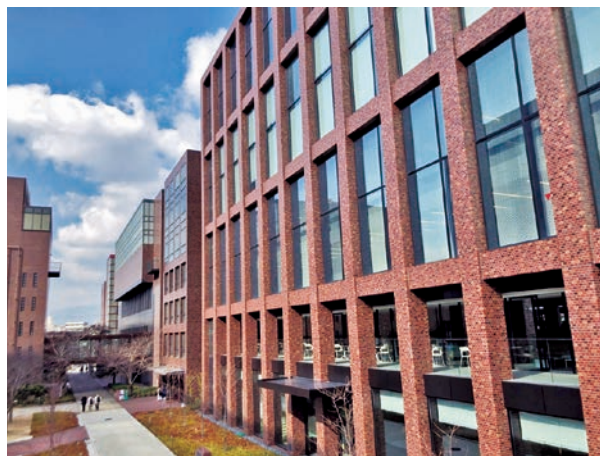
7月時点での状況を紹介すると、広報については、例年の大会案内・申し込みフォーム・ポスターなどの準備と並行して、大会ホームページを7月14日に開設・配信しました。大会ホームページは、参加申し込みから広告掲載まで情報ネットワークの要となります。終始ご尽力くださった井上徹実行委員に心から感謝申し上げます。

また、例年の大会冊子や梗概集送付の準備に伴い、Zoomによる事前練習や大会参加当日用Zoom、WebinarのURL配信計画などをたてました。さらに、研究発表会と記念講演会・見学会の開催会場が異なるため、配信システムと会場の各担当者が連携をとり、中央キャンパスで3回、甲子園キャンパスで2回、現場での配信テストをおこないました。特に、研究発表担当チームは、梗概原稿の分類整理・プログラム作成・司会者依頼など例年の作業に加え、配信システムと研究発表プログラムとの擦り合わせをおこないました。同時に、梗概原稿については郵送にも対応しつつ、Webサイト投稿に大きく舵を切ることになりました。

これらの大会準備は自ずと当日まで続き、大会前日におこなった卒業作品の審査には実行委員の時間が限られたため、今後審査員の構成方法の検討が望まれます。

ホームページでは、大会概要・案内、参加申し込み・梗概受付に加え、協賛企業によるバナー広告掲載をおこないました。したがって、ホームページ担当チームは、掲示内容変更に伴う制作会社との折衝に加え、広告担当者と連携し、協賛企業からの申し込み内容をチェックする必要がありました。この連携には、参加申込者の正・準・賛助など会員の判別や不明な参加メールアドレスの確認作業などが並行しました。このような参加者管理は、ホームページをはじめ研究発表・会計・大会冊子や梗概集の発送作業などと直結します。したがって、参加者管理のIT化については、支部から本部への移行が望まれます。

協賛広告については、依頼とともに冊子およびバナー広告のフォーマットと作成ガイドを準備し、6月15日から実行委員が手分けして企業、各種団体に依頼を開始しました。協賛申し込み締め切りは8月20日（原稿渡し）、協賛金振り込み締め切りは8月31日を目途に作業を進めました。冊子広告掲載18件（全協賛に対してバナー広告



大会本部（第一日目）を設けた中央キャンパス公江記念館

掲載)が、それぞれのページに活気を添えてくださったと思います。これらの協賛広告費32万円は、オンライン開催による低予算化とともに、関西支部における大会収支決算に貢献したと思います。なお、梗概集等の印刷費として、開催校である武庫川女子大学から学会本部に30万円の補助がありました。

これらの準備に際し、長年のご経験に基づき的確なアドバイスをくださった加藤力理事、小宮容一実行委員に、深く感謝申し上げます。

2. 10月23日(土) 開会式(Webinar配信)・研究発表会(Zoom配信)

武庫川女子大学中央キャンパスにおいて、昨年度開設の経営学部棟・公江記念館7階に大会本部を設け実施しました。

(1) 開会式

実行委員長として筆者が開会宣言と司会進行をおこない、現地に駆けつけてくださった直江英雄学会長、続いて三好庸隆大会長(武庫川女子大学生活環境学部長)による開会のご挨拶をいただきました。



大会本部(公江記念館7階)におけるオンライン開会式

(2) 研究・作品発表会

3教室で研究発表、1教室で作品発表をおこないました。各教室(定員20名)において実行委員1名がZoom管理、武庫川女子大学助手1名がタイムキーパーとして常時滞在し、各セッションが実施されました。開催校として準備したPC4台については、システム上、予定していたタイムキーパー用アプリを入力できなかったため、iPhoneのアプリと卓上ベルで対応することになっていました。その音がPCのマイクがノイズと認識しひろわれないという想定外的一幕がありましたが、皆様方の工夫で乗り越えることができました。深く感謝申し上げます。

3. 10月24日(日) 記念講演会・見学会・表彰式・閉会式(すべてWebinar配信)

武庫川女子大学甲子園キャンパスにて、甲子園会館1階西ホールに本部を設けライブ中継しました。映像配信担当者により、マイク・映像の切り替えがおこなわれました。また、今年度大会を関西支部が担当し、開催校である武庫川女子大学が西宮市に位置することから、記念講演会と見学会のテーマを「阪神間」に求めました。

(1) 記念講演会

片山副支部長の司会により、石田潤一郎先生(武庫川女子大学景観建築学科教授)に「阪神間の近代建築」と題してご講演いただきました。「阪神間」の定義づけから始まり、広く東京・大阪で明治30年代後半から始まった郊外居住の背景が、都市の居住環境問題、田園都市論の受容、文学作品や新聞記事における郊外の景観イメージや生活スタイルなど多様な観点から概観されました。そこに阪神間での郊外居住を位置づけ、雲雀ヶ丘・花屋敷、池田室町、香爐園、御影・住吉など豊富な事例と共にご紹介いただきました。阪神間の地域景観が、地形と植生を活かした開発計画、進取の気性があり見識の高い施主、それに応え地域に根差す建築家によるなど、風土への再認識を喚起するものでした。また、阪神間の住宅を特徴づけるスパニッシュ式、アールデコ式については、貴重な画像と共に受容の経緯にまで説明がおよぶなど、興味深いものでした。



オンライン記念講演会「阪神間の近代建築」

(2) 見学会

中村支部長の司会により、「甲子園会館をめぐる一遠藤新とフランク・ロイド・ライト」と題して、筆者がナビゲーターをつとめました。大会見学会をオンラインにする前例は当然ありませんでしたが、関西支部の総意と受け止めて微力を尽くすことになりました。

甲子園ホテル(現・武庫川女子大学甲子園会館)は、昭和5年完成の建築ならではの壁厚をもつため、Wi-Fiの受信スポットが限られ、計画していたライブ中継は困難と判明したのが6月でした。すでに大会プログラムを周知、オンライン見学会の実施も決まっていた。そこで、厳しい条件下を切り抜けるご経験豊富な委員の皆様の「何とかなる」の精神を共有、動画撮影と編集で対応することになりました。夏季休暇中には、酒井実行委員と中村支部長によるインテリア撮影、さらに酒井実行委員のご助力でドローンによる外部撮影を行い事前の映像を準備することが出来ました。

当日は西ホールが大会本部となり表彰式・閉会式の中継すると決まっていたので、見学会も西ホールから開始して最後に同じ場所に戻ることでライブ感を残しました。同時に、見学のストーリーを、動画編集だからこそ可能な、時空を超える場面転換で構成することにしました。初めての動画編集(premier pro使用)にあたり、ピントや手振れの補正もさることながら、膨大な量の微妙に異なる録画映像からどれを選択するかには予想外の時間とエネルギーを費やすことになりました。時間が無い

中でのこうした地味な取組は、ものづくりにつきものかもしれませんが。アイコンをクリックしては中味の確認を繰り返すことは、伝えたい内容のコンセプトを自らに問いなおす作業でもありました。

甲子園ホテルの建築・インテリアは、広大な線形開発地・甲子園の出現に伴う周辺地域の水系・景観の激しい変化を記憶として引き受け、その表現に留めています。また、完成の翌年満州事変が勃発、日本が戦争へ駆り立てられる時代、それに流されない世界平和への祈りが、やはり表現に込められています。今日では地球規模となった近代以来のこれらの課題に対して、「ライト式」に潜ませた遠藤新の意図を、視聴してくださる皆様と共に読み解くことをめざしました。

残念ながらオンライン開催となった見学会は直前まで画像編集に手を取られ、ナレーションの練習も十分ではありませんでしたが、コロナ収束後、一人でも多くの方に甲子園会館にご来訪いただくきっかけとなれば望外の喜びです。名建築が持つスケール感や素材感は、季節、天候、時刻により豊かに変化し、だからこそ実体験に勝るものは無いと思うからです。



オンライン見学会

「甲子園ホテルをめぐる一遠藤新とフランク・ロイド・ライト」

（3）表彰および閉会式

実行委員長による司会で、中継会場からは、直江英雄会長とともに両日お運びくださった白石光昭総務委員長、オンライン画面からは、西出和彦先生（東京大学名誉教授）、松崎元先生（千葉工業大学教授）、高月純子表彰委員長により挙行されました。

〈名誉会員表彰〉

加藤 力（前副会長）、早野 由美恵（前東北支部長）、平田 圭子（前中国・四国支部長）

（順不同・敬称略）

〈学生発表奨励賞〉

「VR（人工現実）空間の活用に関する基礎的考察—ビジネス利用を対象として—」

井本 智佳子（大阪産業大学大学院）

「睡眠導入前の照度別態が睡眠深浅に与える影響に関する研究」

久米村 秀明（東京都市大学大学院）

「子どもの創造性を育む屋内型遊び場に関する研究」

杜 安琪（文化学園大学大学院）

「藤井厚二の永井家住宅に関する研究資料と実測から読み解くインテリアの特徴」

藤田 響子（京都女子大学大学院）



甲子園会館西ホールにおけるオンライン閉会式



甲子園会館西ホールに集合した会長・総務委員長・実行委員一同

〈卒業作品展表彰〉

・最優秀賞

山口 弥桜（熊本県立大学）

「KOJYO-HSPのための休養の場」

・優秀賞

中谷 優花（京都芸術大学）

「【二面性】を持つ劇場—空間の記憶と演劇文化の再考—」

村川 龍司（札幌市立大学）

「LIGHTING：function（time）」

加藤 利基（芝浦工業大学）

「巡礼建築—共同身体性の獲得—」

石賀 亮太、上田 祥文、笠行 優里花（島根職業能力開発短期大学校）

「いわみ三ツ星コンサート」

・特別賞

高橋 祐斗（愛知淑徳大学）

「八日屋 少しだけ特別な日常を過ごせる場所」

山根 啓昂（広島工業大学）「こころの万華鏡」

・奨励賞／高等学校優秀賞

石川日向葵、伊藤香奈、岩村俊介、小野美紅、加納駿司、河村拓磨、四倉葵乃、須加亜樹、比氣咲耶、水田萌夏、山崎薫平、山田風音（千葉県立市川工業高等学校）

「いちかわ・平田郷土歴史板におけるクジラのレリーフデザイン」

■追悼 故建部謙治先生を偲んで

建部謙治先生の早すぎる逝去を悼む

直井英雄（日本インテリア学会会長）

思い返してみると、建部先生とは40年以上の長い付き合いになる。お互い、建築計画の中の人間工学を研究領域としていたので、建築学会大会の研究発表会で、毎年顔を合わせるとというのが知り合った最初である。

そのうちに、だんだんと親しくなるにつれて、個人的な話もするようになり、二人とも素人テニスに熱中していることを知るようになった。いつだったか、建部先生の地元の東海支部で大会が行われた折に、「うちの大学のコートが使えるので、ぜひ1回打ち合いましょうよ」と熱心に誘われたことを覚えている。その時はたまたま都合がつかず、流れてしまったのが、今になってみると心残りといえ心残りである。

その後、インテリア学会が設立されると、建部先生も私も会員として参加することになった。この付き合いも、もう30年近くになる。大体は年1回の大会で、研究発表会や見学会で必ず顔を合わせるのだが、懇親会でのお酒を飲みながらの会話がなにより楽しかった。建部先生のお酒は人柄通りの静かなお酒で、学会の活性化の話や勤めている大学の話など、穏やかな語り口で貴重な意見交換をしてくださった。

建部先生は、たぶん私より7、8歳年下のはずである。どう考えても早すぎる逝去である。インテリア学会にとって、東海支部の重鎮として、また名誉会員として、これからも高い見地から指導的な役割を果たしてくださるものと期待していたのに、残念でならない。今は、ご冥福をお祈りするばかりである。建部先生、長い間ありがとうございました。そのうちに私もそちらに行きますから、そうしたら下手なテニスでもしましょう。

追悼 故 建部謙治先生を偲んで

東海支部長 中井孝幸（愛知工業大学）

2021年9月の初旬に、建部先生の訃報を知りました。ほんの2ヶ月前の7月に、愛知工業大学で開催された名誉教授授与式でお会いして、記念撮影を皆さんと一緒に撮っておられたので、突然の報せに対し、本当に驚きを隠せませんでした。

建部謙治先生は、1973年3月愛知工業大学工学部建築学科を卒業後、3年間長谷部建築設計事務所に勤務され、1978年3月愛知工業大学大学院工学研究科修士課程建築学専攻を修了、同年4月愛知工業大学工学部建築学科の助手に着任されました。1986年4月に同大学講師、1994年4月に助教授、2001年4月に教授に就任され、2021年3月に定年退職されるまで、たいへん長い期間、数多くの学生たちを指導してこられました。

学内においては、2004年学科再編で新設された学科にて、専攻主任として組織の充実に尽力され、2009年に入

試センター長に就任されるなど、大学運営にも多大な貢献を果たされました。インテリア学会では、同理事、同東海支部長、同名誉会員等の重職を務められ、その他日本建築学会での学会活動や地域の社会活動にも、長年に亘って熱心に取り組まれ、数々の賞を受賞されています。

また、建部先生は学内の教職員向けのスポーツイベントに、いつも参加されるスポーツマンでした。2年ほど前から少し体調を崩されていましたが、学内でお会いすると普段通りの挨拶をして頂きました。2021年3月のご退職される際、先生がこれまで様々な学会等で発表されてきた38編の査読論文を取りまとめた「建部謙治 査読論文集」を頂戴し、「頑張れ」と声をかけてくださいました。

分野を超えて幅広く教育研究に取り組んでこられた建部先生のご功績に対し、心から尊敬と感謝を捧げ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

[2021年（令和3年）9月6日ご逝去]

■運営委員会だより

□総務委員会

委員長 白石光昭（千葉工業大学）

2021年の年末3か月ほどは、新型コロナの感染状況が小康状態にありましたが、年が明けてから急速に広がってきております。弱毒化しているとの話もありますが、まだまだ安心はできないようです。会員の皆様もご注意ください。

さて、総務委員会活動としましては、オンラインによる委員会を従来よりも密に行い、学会活動をいかに継続していくかについて議論しております。その中で、このような状況を少しでも打開していくために、学会全体のデジタル化について理事会に提案しました。理事会にて承認後、「(仮) デジタル化推進委員会」を立ち上げて頂きました。委員会メンバーの方々には、今後のデジタル化に向けて議論を始めて頂いております。

次年度の総会や理事会等につきましては、可能であれば対面形式が望ましいと考えておりますが、今後の感染状況はなかなか予測が難しく、オンラインによる実施を想定しておく必要があると考えております。このような状況ではありますが、総会開催に向けて、準備を進めていきたいと思っております（なお、総会の日程はまだ確定していません。日時が決定次第、HP等でお知らせいたします）。

最後になりますが、コロナ禍により何かとご不便をおかけしていると思っております。このような状況ではありますが、会員の皆様には学会活動へより一層のご協力をお願いいたします。

□広報委員会

委員長 棒田邦夫（金沢学院大学名誉教授）

会報第69号をお届けします。コロナ感染の影響でしよ

うか、支部・部会活動の報告が少ないようです。少々寂しく思いました。しかし、これも会員の感染を防ぐためにはいたしかたのないことです。終息を願うばかりです。会員の皆様お体をどうぞ愛ください。

□論文審査委員会

委員長 渡辺秀俊（文化学園大学）

2021年度の日本インテリア学会論文報告集32号については、昨年9月末の応募締め切りまでに13編の応募がありました。2019年度は24編、2020年度は29編と応募数は年々増加していましたが、今年度は若干減少しました。現在、査読委員の方々に審査をお願いしている段階です。応募いただいた会員の皆様、査読にご協力いただいている査読委員の皆様には、厚く御礼申し上げます。なお、アジア地域のインテリア系の学会論文集AIDIA Journalについては、今年度もAIDIA事務局から応募情報の連絡がありませんでした。つきましては、本年度も残念ながら募集なしとなります。

長引くコロナ禍に後押しされるように、近年、様々な情報媒体のデジタル化が進んでいます。本学会の論文報告集も電子ジャーナル化を検討すべき段階に来ているように思います。また、AIDIAとの連携をどうしていくのかという課題もあります。会員の皆様からも、インテリア学会の発信力を高めるアイデア等をお寄せいただけたら幸いです。引き続きご理解とご協力をお願いいたします。

□表彰委員会

委員長 高月純子（女子美術大学）

寒冷の候、皆様におかれましてはコロナ禍の苦境でございますがこの状況を乗り越え、益々のご発展をされていることと拝察いたします。昨年、表彰委員会では、第28回卒業作品展のWEB展示、第33回学会大会の学生論文発表の表彰及び、卒業作品展の表彰を閉会式にてオンラインで発表させて頂きました。学生の皆様、卒業生の皆様、ご担当の先生に感謝申し上げます。

第28回卒業作品展WEB展示は引き続き、インテリア学会HPの行事・イベント欄で閲覧可能に致しております。ぜひご覧頂ければ幸いです。

次年度の第29回日本インテリア学会卒業作品展も開催する予定です。パネルによる展示、またはWEB展示か、展示の方法は未定の状況でございますが、ご出展の検討をいただけるようであれば、卒業作品の選抜と保管等をしていただきたくお願い致します。

学会総会の後に「作品展出展要項の詳細のご案内」をあらためて決定し、教育機関担当者宛てに6月末頃にご連絡する予定です。例年の作品展の準備の流れは下記となる予定です。何卒お含みおきをお願い致します。

〈本年度〉

・1月：卒業作品の選抜と保管等のお願い

〈新年度〉

・5～6月：作品展の会場と出展要項の詳細決定・巡回

展の有無の決定（パネル展示を実施する場合）

- ・6月末：担当者宛てに出展要項の詳細のご案内
- ・7月末：出品登録票の提出の締め切り
- ・8月末：提出作品データの画像提出の締め切り
- ・10月始：（パネル展示実施の場合）作品パネルの提出
- ・10月末・学会大会開催日：（パネル展示実施の場合）学会大会会場にて大会期間に展示。WEB展示の場合、WEB上で期間を設定して開催。
- ・11月：学会HPにて審査結果等のお知らせ

参考として過去の出展要項の概要をお知らせいたします。

【WEB展示、及びパネル展示の共通内容】

＊選抜の人数は1学校で1作品の推薦。

＊[2022年3月卒業予定]の学生の卒業作品の推薦。

＊事前に指定の時期に、出展する卒業作品の画像データを「指定の容量データ」でご提出をお願いします。

＊出品料はございません。

【パネル展示の場合】

＊1学校あたりの壁面量は、間口900mm×高さ1,800mmの縦長の壁面1枚分。

＊応募作品は必ずパネル（貼るパネル・厚紙など軽量なもの）に貼って（筒状にせずに）提出。

＊作品の返却はいたしません。

＊送料は各自でご負担をお願いします。

卒業作品展の連絡のご担当者の変更・ご退職に伴う引き継ぎがある場合は、新しいご担当者のお名前とメールアドレスを表彰委員会までご連絡いただければ幸いです。年度末のご多忙な時期にお手数お掛けしますが、よろしくをお願いします。

□国際委員会

委員長 ペリー史子（大阪産業大学）

特に報告ありません。

□アーカイブ化委員会

委員長 小宮容一（元 芦屋大学）

昨年2021年10月に論文集・梗概集の第1号のみでは御座いますが、J-stageに公開いたしました。公開に際しご協力をいただきました学会員の方々には、この場をお借りしてお礼申し上げます。

以下のURLに掲載されておりますので、ご覧いただければ幸いです。

論文報告集：<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jasis/-char/ja>

梗概集：<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/japaninteriorsociety/-char/ja>

また、残りの論文集・研究発表梗概集は、2021年度（2022年3月末）の掲載完了を目指し30年分のアーカイブ化を進めております。（記・井上徹 芦屋大学）

■支部だより

□北海道支部

支部長 小澤武（小澤建築研究室）

特に報告ありません。

□東北支部

支部長代行 早野由美恵

東北支部におきましては、2020年支部長が岩手県立大学盛岡短期大学の松村光太郎先生が着任され、事務局も岩手県に移行し、新たな東北支部が動き出しました。

しかし、残念なことに順調に運営が進まず、昨年直前まで支部長を賜っておりました、東北芸術工科大学に席を置いていた早野が理事会の承認を受け、支部長代行として再可動することになりました。

今後、支部会員の皆さんの意見も伺いながら活動を再開していき、今季中に支部総会を開催し、時期支部長を選出していきたいと思っています。どうぞ宜しくお願いいたします。

さて、東北の冬季は雪も多く移動にも苦慮することが多い中、卒業制作展を開催する大学も多くあります。それぞれの大学が厳しい環境の中で前向きに行動しています。山形県の東北芸術工科大学もその準備の最中です。感染防止に注意しながらの開催です。



□関東支部

支部長 内田和彦（(株)オカムラ）

特に報告ありません。

□東海支部

支部長 中井孝幸（愛知工業大学）

2021年7月31日（土）オンライン（Zoom）にて第2回支部役員会を開き、その後支部総会を開催し、参加者は

13名でした。役員会では、総会に係る資料の確認、内規の制定、今年度の支部事業について協議しました。支部総会では、事業報告、収支決算書報告、会計監査、事業計画、収支予算書について審議し、承認されました。今年度もコロナ禍での支部事業となるため、感染状況を見極めながら活動を行うことになりました。役員会にて、私が主催していた三重県K図書館での「わくわく本棚づくり」ワークショップへの後援を協議して頂きましたが、コロナウイルス感染拡大のため急きょ中止となり、たいへん残念でした。

第3回支部役員会は、2021年9月21日（火）オンライン（Zoom）にて開催しました。開会に先立ち、本会理事及び東海支部長を務められた建部謙治先生のご逝去（本年9月6日）に接し、ご冥福をお祈りし、黙祷を捧げました。昨年度の役員会から、「話題提供」を行うことにしており、この日は名古屋工業大学名誉教授の松本直司先生に「障子の影—小泉八雲・夏目漱石の話から始めます」をお話して頂き、日本建築における光と影の扱い方などたいへん興味深い内容で、意見交換も数多く交わされました。前回の役員会で話題に上がった見学会も、コロナウイルス感染拡大を考慮して企画は見送られました。

第4回支部役員会も、2021年12月21日（火）オンライン（Zoom）で開催しました。この日の「話題提供」では、名古屋工業大学名誉教授の河田克博先生に「安土城『天守指図』の信憑性」と題して、建築学会でも論争となっている安土城について解説して頂き、意見交換も大いに盛り上がりしました。主な審議事項は、今後の支部事業についてでしたが、コロナウイルス感染拡大の状況を見て、見学会などを企画していくことが確認されました。

一度は収まりかけたように見えたコロナウイルス感染症ですが、まだまだ猛威を振るっています。こうした中でも、やれることをしっかりと行い、支部会員へのサービス向上はもちろん、地域社会との交流活動にも取り組んでいきたいと思っています。

□北陸支部

支部長 棒田邦夫（金沢学院大学名誉教授）

石川県内コロナ感染まん延防止等重点措置適用が度々実施されており、なかなか支部活動ができない状況です。とはいうもののこのままではコミュニケーション不足で活動休止状態が続いてしまうことを心配しております。まだまだ終息とはなりません、せめても次年度はテレワークを頻繁に開いてコミュニケーションを重ねて、新しい企画を考えていきたいと思っております。どうぞ本年もよろしくお願いいたします。

□関西支部

支部長 中村孝之（生活空間研究室）

今年度は、「日本インテリア学会第33回大会」の実行委員会を組織して準備を重ね、当学会では最初となるオンラインによる大会運営を行いました。詳細については、黒田実行委員長からの報告が掲載されていますが、

開催方法を検討した上で実施詳細を決定し、研究発表会、講演会、見学会等のチームを組織して、多くの支部メンバーが関わることとなりました。支部としては、大会行事として実施した講演会・見学会を、「阪神間の近代建築と甲子園会館」と題して、関西支部の活動で連携する関西インテリアプランナー協会など学会員外の関係者にも案内して、オンラインならではの外部参加も促進しました。

また、学会として懸案になっている次世代の育成や誘致にもつながる事業として、学生が日頃行っている研究や制作を学外に発表する機会を与える、「関西支部学生研究発表会」を3月5日に行いました。日頃の研究テーマから、論文部門8題、作品部門10題の登録があり、オンラインで発表し、学会員の専門家の方々から貴重な意見やアドバイスをもらうことができました。さらに、優秀な発表を表彰する簡単なアワードを実施しそれぞれの部門で、最優秀賞1題、優秀賞2題を選出しました。関西圏でインテリアを志す学生たちの交流の場になればと考えていましたので、今後はリアルに集まることができればと思います。

このような事業の実施を通じて、オンラインでの運営に関わるICT関連の整備が進んでいることも成果の一つではないかと思えます。今後は、リアルに学会員が集い、活発な議論を交わせる時期が来ることが望ましいと考えますが、オンラインのメリットも利用して、学会の活性化に向けて次年度の活動を検討していきます。

□中国・四国支部

支部長 谷川大輔（近畿大学）

特に報告ありません。

□九州支部

支部長 近藤正一（日本文理大学）

今回も支部会員の活動をご紹介します。シリーズ3回目です。まずは、九州産業大学建築都市工学部住居・インテリア学科 諫見泰彦先生の活動です（以下ご本人による文章）。

長崎・大村湾HUB構築プロジェクト

九州産業大学地域貢献実践ゼミナール（諫見泰彦研究室）の学生11名は、2021年3月から12月まで、株式会社DE-SIGNグループのファミリー企業である株式会社大村湾商事と連携した「長崎・大村湾HUB構築プロジェクト」に参画しました。長崎県大村市には長崎空港や長崎道の2つのインターチェンジがあり、2022年秋開業予定の九州新幹線・西九州ルートの新大村駅も新設され、東京・名古屋・大阪・福岡などからのアクセスにも優れています。

プロジェクトは、大村市本町通り商店街にある2階建ての空き店舗を、HUB機能を持つコワーキングスペースとして再生し、前述の新大村駅新設に伴い注目される、既存のJR大村線・大村駅周辺の再活性化の一助になることも睨んでいます。ゼミナールの学生は再生のための設



長崎・大村湾HUB構築プロジェクトの様子

計案の口頭発表、ポスター・模型の展示発表、提案検討のためのワークショップ、大村市民へのプレゼンテーションを実施しました。またコロナ禍に影響されるスケジュールを工夫しながら可能な限り施工にも携わり、プロジェクトの実現に寄与しました。

1階には地域住民が集い、ビジネスや観光での来訪者が情報を得るカフェとコワーキングスペース、2階には事業所を置きたい企業が入居できるサテライトオフィスを備えたこの場所は、「琴の海」と別称される大村湾からの発信や、多くの「事」を起こしていく拠点になることなどを目指して「coto」と名づけられ、2021年10月に開店しました。

また、熊本県立大学環境共生学部環境共生学科居住環境学専攻 高橋浩伸先生がこのたび「現代空間美学 一建築において「美」を考える一」を花書院より上梓なさいました（以下ご本人による文章）。

現代空間美学 ―建築において「美」を考える―

この「現代空間美学」は、科学的知見や学際的視点、また現代的思想・哲学によって、あらためて〈美〉を規定し直す試みとも言えます。また、更に言い換えれば、かつて15世紀に興ったルネサンスにおいて再認識された〈人間中心〉的考え方を今一度、再々認識し、セカンド・ルネサンスと言える建築理念のシフトチェンジを提唱するものです。

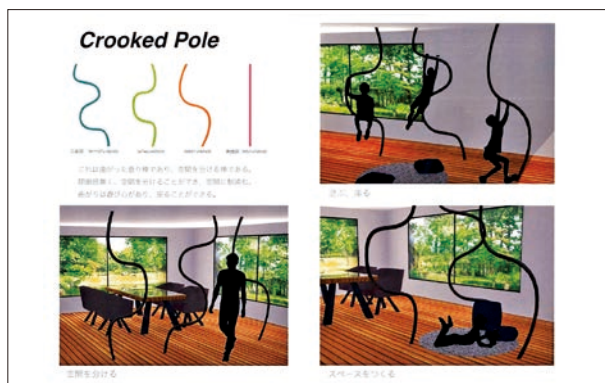


家具デザインコンペ

最後に、学生向けコンペの後援についてのご報告です。九州全体のインテリアデザインを志す若者の底上げのために、工業高校生・専門学校生・大学生が幅広く応募しやすい敷居の低い継続的なコンペ事業が必要だと考え、熊本県インテリア設計士協会および大分県インテリア設



「ステイホームが楽しくなる家具」最優秀賞
熊本工業高校 インテリア科 3年 西田汐恋さん



「ステイホームが楽しくなる家具」優秀賞・JIA賞
近畿大学 建築・デザイン学科 3年 野上朱里さん

計士協会主催により10年連続で家具デザインコンペを開催してきました。今年度より日本インテリア学会九州支部が後援に加わり、応募者総数はこれまでで最大の99名となりました。今後も九州において裾野を広げる活動を継続的に応援していくことにより、延いては地域のインテリア文化の発展につなげていきたいと考えています。

■研究部会だより

□人間工学部会

部長会 白石光昭（千葉工業大学）

最近、活動のご案内を出せずに、心苦しく思っております。人間工学分野において、開催してもらいたいとの話題がありましたら、ぜひご連絡をください。対面形式では難しくても、オンラインシステムを利用し、研究会等を企画したいと思います。ぜひ白石までメールにてご連絡いただきたく。

（連絡先 mitsuaki.shiraishi@it-chiba.ac.jp）

□教育研究部会

部会長 金子裕行（千葉県立市川工業高等学校）

特に報告ありません。

□歴史部会

部会長 河田克博

特に報告ありません。

□期限付き研究部会

部会長 西出和彦（東京大学名誉教授）

特に報告ありません

■特集記事

【コロナ禍での「新生活様式」「3蜜」「ソーシャルディスタンス」に思う】

□いつもともしもをつなぐフェーズフリーのインテリア

松崎 元（千葉工業大学教授）

非常時が日常となったコロナ禍において2020年の梗概原稿、続く2021年の大会発表では、「フェーズフリー」をテーマとしてインテリア分野におけるその重要性を論じ、現状の活動報告と今後の可能性についてお伝えした。フェーズフリーとは、日常の生活の質を高めつつ、非常時にも役立つプロダクト、サービス、施設などにより、大小様々な災害に、備えなくても対応できる社会を作っ

ていくための考え方である。2014年に佐藤唯行によって提唱された防災に関わる新しい概念で、「バリアフリー」「ユニバーサルデザイン」「エコ」のように、デザインやインテリアの世界でも少しずつ目にするようになってきた。日頃から非常時を想像して備えることの難しさは災害の度に感じることだが、公共施設や商業施設、オフィスや学校でも防災のための予算は限られており、いつ起こるか分からない災害時のためにコストをかけることは難しい。普段使わないものを大きなスペースを割いて備蓄しておいたり、使用頻度の低いものに多額のコストをかけたりすることも十分進まないのが現状である。

感染症対策を行いながらの働き方、教育の現場、食事の空間、子育ての環境、コミュニケーションのあり方、いずれも「withコロナ」と言われる今後の社会にとって、日常の価値と非常時の価値を見つめ直し、インテリア学が対象とする室内空間や設備機器、人と人との関係性を計画していく必要に迫られている。人は日常生活の多くを、インテリアとの関係の中で過ごしており、この分野がフェーズフリーな社会を作り出す上で非常に重要な領域だと言える。この数年で市庁舎や公共施設建設の基本計画に「フェーズフリー」が盛り込まれるようになり、オフィス家具メーカーでは、フェーズフリー認証の家具が発売されるなど、具体的なプロダクトや施設で適用されは始めている。

本年2021年には、フェーズフリーへの理解、社会への普及、多くの人々の参加を目的とし、「第1回フェーズフリーアワード・シンポジウム」（主催：一般社団法人フェーズフリー協会）が開催され、幅広いカテゴリで多くの応募を集めた。アイデア部門の入選31対象のうち11対象、事業部門の入選40対象のうち18対象が、インテリア、オフィス、住空間に関わる商品や施設で、日常の生活や仕事に関わるインテリア領域での展開が、フェーズフリーな世の中を実現する上でいかに重要かを表す結果となった。日常の暮らしを向上させつつ、災害時の問題を解決するインテリアのフェーズフリーについて、アワード・シンポジウムなどを通して、多様な審査委員、幅広い業種のクリエイター、様々な専門分野の学生の応募による継続的な活動として、今後の更なる発展を期待し、研究分野としてのインテリアにおいても発展に尽力したいと考えている。

□コロナ禍における住まいの変化

リノベーションを行ったT邸を通して

米島一朗（土屋ホームトピア）

1 はじめに

コロナ禍となり、仙台市においても緊急事態宣言、まん延防止等重点措置が次々と発令された。私はハウスメーカーにてリノベーションの設計を行っているが、コロナ禍で、今までうけたことのない相談を受けた。戸惑いながらもコロナ禍での生活の変化を考えさせられる機会になり、本原稿は生活環境が激変したT邸の事例報告である。

2 建物概要

所在地：仙台市青葉区、構造：鉄筋コンクリート造、新築竣工時：2003年、築年数：20年、施工期間：53日、



図1 リノベーション前の平面図



図2 リノベーション後の平面図



写真1 寝室兼テレワーク室4 オンとオフの空間

工事床面積：70.48㎡、工事金額：1,317万円、
居住者家族構成：40代、一人暮らし

3 生活の変化工事内容

コロナ禍となる前は通勤勤務であったが、コロナで在宅勤務となったことで、生活環境が激変した。施主は仕事をするには不適切な環境と改めて感じた。それは①テレワークしている書斎が狭く、北側の窓が小さく暗い。②北側窓の結露が激しく、室内空気環境が悪い。③移動の際いちいちドアを開け閉めしないとイケなく、そのことがストレスになっていた。

外周部の躯体に断熱パネル、内窓を施工、家の断熱性能を向上させ、結露対策を行った。工作中（オンの時）と仕事を離れたオフの区別をするため、生活の区分を分

け、インテリアを区別した。仕切りを減らし、北から南へ通風を確保した。

4 オンとオフの空間

テレワークを行う部屋は寝室との壁を取り払い、一つにしている。施主が最もこだわったのは部屋の広さよりも、北側寝室窓からの通風である。北側寝室から南へかけて風通しよくして、新鮮な空気が入れるように配慮した。壁には調湿性のある壁材を施工し、間接照明を配置し、仕事に癒しを与えるよう配慮した。床材と建具には明るめのオーク系の無垢材を使用した。玄関（写真2）の横に引き戸を二つ設けた。一つは宅配が届いた時にすぐに対応して収納にしまえるようにしている（図2）。コ



写真2 玄関

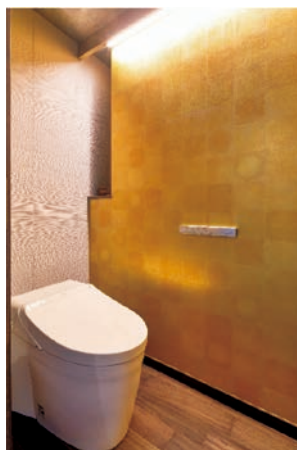


写真3 トイレ



写真4 LDK



写真5 LD

ロナ禍で宅配を利用する機会は増え宅配された物をすぐにしまえるようにとの施主からの要求があった。トイレ（写真3）はオフの場として壁一面、金色のアクセントクロスを張り、上部に間接照明を施工。LDK（写真4）は普段の生活する場所（オフの場所）であり、畳の小上がりを設けた。施主が疲れて横に座ったり、そこに座ってテレビを見たりとオフの場として利用。奥には趣味の楽器（チェロ）の練習ができる場所とした（写真5）。オフの空間は床材と建具にはウォールナット系の建材を使用し、ウォールナット調の色で統一し、テレワーク室のインテリアと分け、生活にメリハリをつけた。

5 まとめ

会社通勤で仕事をされていた時は家の外が（オン）であり、家の中がオフの場所であったが、コロナ禍で在宅勤務になり、家の中でオンとオフの区別をつけるかが課題になった。人の住まいに対する生活意識が変化している。

□「コロナ禍におけるインテリアはどうあるべきか。」

徳田良英（帝京平成大学教授）

コロナ禍の長期化で私たちの生活は大きく様変わりしました。COVID-19はヒトが宿主となることから生活のあらゆる場面で対人距離や人の密度を気にする必要に迫られました。私たちが生得的若しくは文化的に身につけた対人距離をエドワード・ホールは著書『かくれた次元』で「密接距離」「個体距離」「社会距離」「公衆距離」の4類型にまとめていますが、コロナ禍ではホールの言う「密接距離」「個体距離」はソーシャルディスタンス（2m）の確保の観点から感染危険ゾーンに含まれることになります。人の所作として「密接距離」「個体距離」は比較的親密な関係で生じる対人距離で、これを人為的に回避するのは通常の振る舞いで容易ではありません。せめてインテリアにより人々の互いの関係性を維持しながらも適度な物理的な距離は保つことができるような工夫はできないものか、と考えます。このためにはまずはインテリアを収める空間のゆとりが必要と感じます。大部屋は個室化若しくは個で区切られたレイアウトにし、長椅子や会議机など、皆が会することを必然となるような場はこの際止めてみるのも一案かもしれません。インターネット回線を用いたテレワークの活用も念頭にレイアウトを見直すのも良いのかもしれません。また、インテリアを室内に配置する仕方により空調・換気効率がどうなるのか、詳しくはわかりませんが影響があるように思います。例えば住宅にインテリアを置く場合、住人がどこにどんなインテリアを置こうが自由であるが故に、無造作に置かれたインテリアが換気に必要な窓を塞いでしまうことなどは実際にありそうな気がします。この辺りは実態がわからないため、今後、調査があればありがたいです。加えてインテリアの衛生面も心配です。掃除やアルコール除菌など日々の生活には欠かせませんが、毎日のことで手間もかかるため、どの程度すれば良さそうなのか、ちょっと気になります。ドアノブ、手すり、点字など人が手で直接触知するものは特に気になります。

□お礼及びお願い

広報委員長 棒田邦夫（金沢学院大学名誉教授）

「コロナ禍での「新生活様式」「3密」「ソーシャルディスタンス」に思う」に原稿のご投稿をいただきありがとうございました。企画者として紙面をお借りして御礼申し上げます。

令和2年（2020年）の1月頃から徐々に広がりを見せてきた“コロナ感染”。私自身、例年流行する「インフルエンザ」のようなもので春になれば治るものと思っていた。が、2月、3月と過ぎて治るどころか広がりを見せていることに驚きました。そうして令和4年（2022年）2月、未だに終息の先が見えていません。人が快適に思うインテリアをデザインする者として「これまで築き上げてきたディテールでは新生活様式に対応できないのではないか？もしくは使えないのではないだろうか？」「いやいや、新しいディテールをつくらないといけないのではないか」と思っております。会員の皆さんはどうお思いでしょうか。

つきましては、次号以降も「特集記事」を続けて掲載していきたいと存じます。準会員、新入会員の皆様もこのコロナ感染の中色々と思うことがあったのではないのでしょうか。難しく考えずに思ったことを素直に投稿頂ければ願っております。正会員、賛助会員の皆様もご投稿よろしく願いいたします。投稿原稿の文字数は①または②でお願いいたします。写真・図面には350文字が使用するとお考えください。

①：1／2ページでは1,250文字以内。

②：1ページでは2,600文字以内。

■編集後記

広報委員長 棒田邦夫（金沢学院大学名誉教授）

発行が思いどおりの予定でお届けできず心苦しい日々でしたが、何とか本年度2冊目の会報第69号をお届けできてホッとしています。今年度は私事務局業務も兼務しての編集作業でした。が、事務局業務に携わってみて会員としていろいろと反省させられることが多く、次年度から業務に携わる人への思いやりを持って行動しようと思いました。

会報に戻しますと、原稿を投稿してくださる方が大変少なくなってきたように感じました。これもコロナ禍で活動が制限されているからでしょうか？それとお仕事に忙しくて会員相互の交流に関心が薄くなってきたのでしょうか？

今、手紙・ハガキの宛名の書き方もわからない学生が

■事務局だより

事務局長 棒田邦夫（金沢学院大学名誉教授）

訃報のお知らせです。

当学会の設立発起人でもあり、長年副会長として学会運営の柱でもあった加藤力先生が2021年（令和3年）12月16日、逝去されました。

心よりご冥福をお祈りします。

当学会の設立時より学会運営に多大な貢献をしていた、名誉会員でもあります日原もとこ先生が2022年（令和4年）3月2日、逝去されました。

心よりご冥福をお祈りします。

昨年の2月より出産でお休みしていました伊藤千佳様は4月より学会の事務に復帰していただけるようになりました。皆様には、私の慣れない業務で大変ご迷惑をおかけしました。もうしばらくですでお待ちください。

います。これまでのコミュニケーションツールである手紙・ハガキが消滅しようとしている中で、今後会報の紙面項目や内容など会員が何を求めているのかを考える必要を感じました。次年度もよろしく願いいたします。

■日本インテリア学会会報第69号（2022.3.28発行）

編集者：棒田邦夫

発行者：直井英雄（日本インテリア学会会長）

広報委員会：棒田邦夫（委員長）

角田静香、清水隆宏、西岡基夫、
松尾兆郎

e-mail：k-bouda@kanazawa-gu.ac.jp（棒田邦夫）

■事務局

日本インテリア学会 事務局 伊藤千佳、棒田邦夫

〒920-0941 石川県金沢市旭町1-25-25

電話：080-2386-5652 FAX：076-224-8186

e-mail：jimukyoku@jasis-interior.jp